

「思い出日記」書き続け50冊

「楠郷小学校は、私の母校である。南郷と楠公さん（楠正成）の郷里を意味する。土地の人は、この校名に誇りと愛着を抱いている。しかし、明治7年創立のこの小学校は、百年超の校歴を誇りながらも、過疎化の影響で廃校になってしまった」

伏谷勝博（ふしたに・かつひろ）さん（75歳）が書いた著書「河内の四季つれづれ」（竹林館）の書き出しの部分です。図書館で

偶然この本を手にして、私は20年近く南河内に住みながら、この地域のすばらしい自然や風土、伝統や生活ぶりについて、全く知らない自分に呆然としました。

伏谷さんが昭和20年楠郷小学校に入学したその時期B29が不気味な爆音を響かせ上空を通過し空襲警報のサイレンが鳴っていた。大阪や堺は焼野原になっていたという。こうした生活史も高度成長の陰に忘れ去られてしまい、改めてこの

著者伏谷さんはどうされているのか気になりました。



書き続けている「思い出日記」

伏谷さんは南河内の山や野に対する愛着の気持ち、四季おりおりに感じたことを毎日書き続け、大学ノートに50冊。名づけて「思い出日記」。少年時代の記憶

や体験などを選んで3冊の本を出版しました。

伏谷さんは、30年連れ添った妻をガンで亡くしました。発見された時は、進行ガンでタチが悪いと聞かされた。「妻の精神的な苦悩は深刻だったに違いない。妻は内心の不安をあまり見せなかった。その後、妻が亡くなった今でも、私は妻のこの不安に寄り添ってやれなかったことに悔恨をおぼえています」。

処女作「河内の野面」（文芸社）はガンで亡くなった奥さんに捧げられました。

伏谷さんは「寺ヶ池」の夕景を眺めながらの散歩が大好き。日々の健康で守っていることは「何にでも好奇心や興味を持ち、家の中にこもらず外に出て、前向きな明るい気持ちで過ごします。散歩したら、すれ違う人と挨拶を交わす。声をかければ返事が返ってくる。人とのつながりが生まれ、暮らしの視野が広がる」と言っています。

伏谷 勝博さん (南貴望ヶ丘)



南河内の自然について語る伏谷さん

ご詠歌の山下りくる夏木立

伏谷さんの日常は畑仕事、山仕事に追われています。

南河内は、高齢化と過疎化の中で休耕田が多い。実家が延命寺の近くにあって、休耕田にしないためにも野良仕事に精を出しています。

また、俳句も趣味で一日一句、百句をめざして日々

励んでいます。

河内長野市の助役時代、亡き妻が大病を患い、その回復を願って、ともに般若心経を唱えながら西国の霊場を訪ね歩きました。その折に詠んだ一句に

「ご詠歌の山下りくる夏木立」

があります。

(羽賀 敬晃)